

おumi 漁具図鑑

25 押し網

投網と同じ原理で捕獲

押し網という道具は、「網」というには奇妙な形をしている。円錐形の竹の骨組みに、ごく粗い網を張った作りである。

琵琶湖の湖岸一帯にみられるが、なかでも干拓前の中湖の湖や伊庭内湖など、湖東地方の内湖沿岸でよく使われていた。

過去の文献をみると、「上からかぶせて魚をとる」と書かれている。もっとも閉じ込めた魚をとるにも、手を差し入れる口はないし、刺し網のように網目に魚がさきるとも思えない。

上からかぶせるだけで、本当に魚がとれるのだろうか。

タツベや網モンドリと違い、押し網は早くに使われなくなった。現在では聞き取りも難しいが、幸運にも、大正11年生まれ

の古老、東近江市福堂町の田井中春蔵さん(96)に、押し網の

仕組みを解説してもらった。できた。「投網の小さいようなもんやな」という春蔵さんの言葉で謎がとけた。

春蔵さんによると、押し網の側面の網は、上端で引つ掛けて止めてあるだけで、骨組みには固定されていない。魚に伏せ、引つ掛けた網をゆるめると、「網がごとと下がる」。つまり網がずり落ちて、裾が袋状にゆったりと広がるのである。

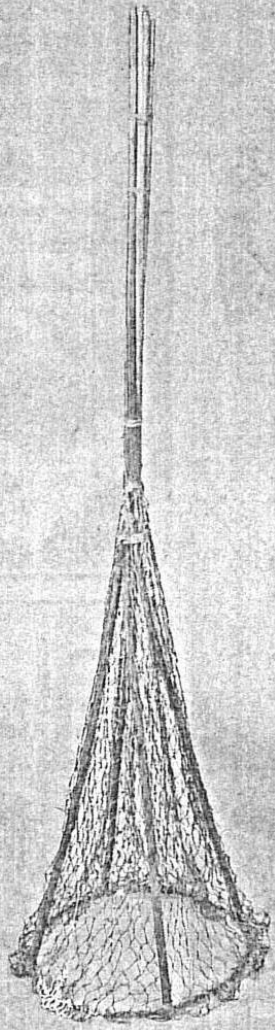
なるほど、博物館の資料をみても、網の多くは上に吊り上げてあるだけで、簡単に落とせる仕掛けになっている。中で暴れて逃げようとする魚は、たるんだ網の裾に入り込み、からまつたまま引き上げられるというわけだ。

福堂が面する大中の湖では、干拓までは押し網で主にフナを

とっていた。季節は3月から6月。暗くなつてからひとりで田船を漕ぎ出し、竿で船を操りながら岸のヨシ沿いをまわる。ランプの灯りで照らし、ヨシの間や水中の藻のなかにいる魚をとらえていく。漕ぐ・照らす・押すの一人三役で、これを夜が明けるとまで一晩中続けたという。

押し網は「すくう」網でも「追い込む」網でもないが、逃げようともがき暴れる魚の動きを巧みに利用している。じつはこれは投網と同じで、魚に網を覆いかぶせたあと、魚を裾の袋に入り込ませてとらえる仕組みは共通している。サイズも形態も材質もまったく異なる網どうしだが、捕獲の原理が一致しているのは面白い。

(琵琶湖博物館学芸技師 渡部圭一) 隔週木曜掲載です



押し網(口径43.5寸、高さ170.5寸、網目4.0寸)